

# 韓国語の「-ㄹ-」と「-을 것 이-」の出現を決定する情報の登録領域について—直示性の観点から—<sup>1</sup>

## A registration area of the information which determines the appearance of *-keyss-* and *-ul kes i-* in Korean: from the viewpoint of deixis

金 善美

KIM Sunmi

### 1. はじめに

韓国語の未来時制補助語幹「-ㄹ-」と述語末形式「-을 것 이-」はその出現方式において差がある。これらの両形式については、従来の研究において話し手の「意志・意図」や「推量・判断」を表すモダリティ形式としての働きが指摘されてきた。本稿においても「-ㄹ-」と「-을 것 이-」のモダリティ形式としての働きに注目し、これら両形式の出現方式の差をもたらす要因として基盤情報の知識領域（もしくは心的領域）内の登録位置の違いを中心に検討する。その際、談話理論における知識領域の拡張のような理論装置を通じて、「-ㄹ-」と「-을 것 이-」の出現を決定する情報の登録領域について直示性に焦点を当てて、主に「推量・判断」用法を中心に考察を行う。

本稿で使用するモダリティという用語に関しては、「事態や相手に対する話し手の判断・態度を表す文法形式を一括してムード」と呼んだ益岡・田窪(1992)の定義におけるムードと同等の意味で使う。さらにモダリティの種類に関しては、日本語において森山(1989)が、①ダロウを含めコトガラに対する広い意味での蓋然性の認識を問題にするムード形式を認識的ムード形式(epistemic mood)、②原則として未成立の事態であるコトガラに対して動きを策するムード形式を策動的ムード形式(deontic mood)と分類しているが、本稿もこの分類方式に従う。

以下の例(1)と(2)において、韓国語の未来時制補助語幹「-ㄹ-」と述語末形式「-을 것 이-」の用法の違いについて考えてみたい。

---

<sup>1</sup> 本稿は科学研究費補助金（課題番号：21320082）及び科学研究費助成事業（課題番号：25284078）の成果の一部である。尚、本稿は社団法人韓国言語学会 2008 年度冬季学術大会において口頭発表を行った 김선미他(2008)(金善美他 2008)の内容を基に加筆し発展させたものである。

- (1) a. 오늘은 제가 가겠어요.

「今日は私が行くつもりです。」

- b. 오늘은 제가 갈 거예요.

「今日は私が行くつもりです。」

- (2) a. (目の前の料理を見ながら) 와! 맛있겠다! 「やあー、美味しそう!」

- b. (目の前の料理を見ながら) ??이 요리는 아까 궁중요리 전문가가 만들었으니까 맛있겠다.

「??この料理はさっき宮廷料理専門家が作ったので美味しそう。」

- c. (目の前の料理を見ながら) 이 요리는 아까 궁중요리 전문가가 만들었으니까 맛있을 것이다.

「この料理はさっき宮廷料理専門家が作ったので美味しいだろう。」

例(1)のように「意図」として解釈される場合には多くは、「-겠-」と「-을 것 이-」の間で大きな相違点が見られるわけではない。一方、例(2)のように推量を表す場合には二つの形式の間で容認度や用法上の違いが見受けられる。

このような二つの形式の違いは疑問文においてより明確になる。以下の例(3)と(4)の用法の観察を通じてわかるように、未来時制補助語幹「-겠-」は制約なく疑問文において使用可能である。しかし述語未形式「-을 것 이-」は推量の解釈においては相当に限定された場合に限って疑問文に出現可能である。

- (3) a. 내일은 당신이 오겠습니까?

「明日はあなたが来る予定ですか。」

- b. 내일은 당신이 올 것입니까?

「明日はあなたが来るつもりですか。」

- (4) a. (道行く人が空を見上げながら、畑仕事をしている人に挨拶として声をかけて)

내일은 비가 오겠습니까?

「明日は雨が降るでしょうか。」

- b. (道行く人が空を見上げながら、畑仕事をしている人に挨拶として声をかけて)

\*내일은 비가 올 것입니까?

「??明日は雨が降ることになっていますか。/\*明日は雨が降るつもりでしょうか²。」

---

² 「\*明日は雨が降るつもりでしょうか」の容認度と関連して、玉井尚彦先生から「明日、雨でも降るつ

上の例文において、各例文の(a)に使われた未来時制補助語幹「-ㄹ-」は述語の主語に関係なく使うことができる。特に例(4a)の「-ㄹ-」の出現は「目の前に広がる曇り空」という視覚的・直示的な情報への話し手の認識の成立から可能になったと言える。しかし述語未形式「-을 것 이-」が使われた各例文の(b)においては述語の主語によって容認度に差が生じる。即ち、例(3b)は翌日の予定と関連する聞き手の意志について聞く文脈の中で使われた場合は容認度に問題がない。しかし(4b)の韓国語は非文であり、これは雨を降らせる能力を持った神のような存在にしか聞けない質問である。(4b)の日本語直訳として考えられる二つの邦訳文も不自然に感じるが、そうなる理由は、神のような存在に雨の降るスケジュールについて質問するか、雨自体にまるで意思があるかのように質問することになってしまうためである。このような容認度上の制約を理解するためには、未来と推量の関係、判断と質問という行為に関する考察が必要であるが、田窪・金善美(2009)において一定の結論を導き出している。

田窪・金善美(2009)では上記の例(3)と(4)の違いについて次のように説明する：すなわち「(1)韓国語-을 것 이-や、日本語ハズダ、ニチガイナイのような認識モダリティで必然を表すものは、原則的に肯定文のみ使用可能で、質問することができない。(2)(1)の必然を表す認識モダリティは、真偽が決まっている状況、すなわち、発話時点、あるいは参照時点で決定している「未来の状況」あるいは「現在のノンダイクティックな状況（直接観察できない状況）」を表すために質問ができない。(3)日本語ハズダ、ニチガイナイは、ノダをつけて現在の状況、過去における参照状況（過去の現在）に対する説明として、メタ的な解釈を可能にすると質問文にできる。-을 것 이-はこの様な用法が不可能である。(4)自然現象に関する質問など普通聞き手が決定権を持ってない現象に関し、-을 것 이-が質問できるようにするためには、ダイクティックな状況に対するアブダクティブな解釈を強制し「～ことになっている」という解釈にしなければならない。すなわち「現在の状況は、p であることが決定している状況であるのか。」という解釈が可能な場合のみ可能になる。」との結論に至っている。さらに金善美 (2009)においては「-을 것 이-」の疑問形が反語的な意味をもつ時、聞き手に質問の答えを求める通常の疑問形と異なる特徴をもつことについて検討している。

本稿では、田窪・金善美(2009)、金善美 (2009)の成果を踏まえつつ、両研究で本格的に取り上げなかった「-ㄹ-」と「-을 것 이-」の出現方式の違いについて、両形式が表す推量と意志の決定に関与する情報が登録される知識領域に注目し説明を試みる。以下の第2節

---

もりか。」ならば、本文にあるように神か超自然的存在に語りかけるという状況を想定すれば容認度が「？」くらいまで上がるとのご指摘をいただいた。



ら D を引いた部分)から構成されるとのことである。

このような D-領域の上位概念である R-領域に比べて、R-領域以外の領域は推論や伝聞によってのみ知識獲得が行われる。田窪はこの推論という手段によって獲得された知識の内、真偽未決定の命題を I-命題と呼び、R-領域以外の知識はこの I-命題によって構成されると説明する。またこの I-命題によって構成された知識領域（すなわち R-領域以外の知識領域）を I-領域と呼んでいる。I-領域は変項だけを含み、談話文脈によって付加される付置が変わると説明している。

以上から田窪(2006)の談話管理理論においては、本稿の「-ㄹ-」と「-을 것이-」の出現を決定する情報の登録領域として「D-領域」が関与することが考えられる。

## 2.2 東郷の談話モデル

次に、本稿の二つ目の理論装置である東郷(1999, 2000, 2001)が提案した談話<sup>3</sup>モデル(discourse model)とは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的領域のことである。東郷の談話モデルには、導入された指示対象が登録され探索される領域として、「共有知識領域」「発話状況領域」「言語文脈領域」の三つがある。「共有知識領域」は、発話の初期値として与えられ、話し手と聞き手の間で一致していると想定される「百科事典的知識」と、話し手だけが持っていて聞き手とは共有しない知識も含まれる「エピソード記憶」からなると説明される。「発話状況領域」は、話し手と聞き手を含む発話の現場と、その場に存在するものに関する心的表象である。この発話状況領域も発話の初期値であり、話し手と聞き手の共有するものだと思われる。「言語文脈領域」は、これらの領域とは違って、談話の開始時点でその値がゼロだと説明される。その理由としては言語文脈領域には、談話の進行に従って談話に出た指示対象と、それに関する情報が登録されるからだ東郷は説明する。

以上から東郷の談話モデルにおいては、本稿における「-ㄹ-」と「-을 것이-」の出現を決定する情報の登録領域として、「共有知識領域」と「発話状況領域」が関与することが考えられる。

## 3. 直示、直示空間、直示性について

本稿における「直示」、「直示空間」、「直示性」の概念については、金善美(2006)を踏まえて次のように定義する。まず「直示」についてであるが、「直示(deixis, deictic)とは、言

---

<sup>3</sup> 東郷(2000: 28)によると、談話(discourse)とは話し手と聞き手の相互行為により時系列に沿って局所的に構築される心的表象(mental representation)である。

語理論の中で、その意味がその状況に関係するような発話が行なわれている状況の人称的、時間的、場所的特徴に直接言及する言葉の諸性質を包含するために使われる用語」<sup>4</sup>である。次に「直示空間」については、金水(2000:161)も「現場指示を用いるための条件としては、「見えること」よりも「存在していること」を要件とした方が現象をうまく説明できる」と指摘し、さらに「指示対象が存在する場所を仮に「直示空間」と呼んでおこう」と説明している。本稿における「直示空間」は、この金水(2000)の説明に加え、話し手が発話の現場においてある事態を経験した直後に、その事態の存在を意識し、まるで目に見えるかのように言及する際に指示する空間のことを意味する、と考える。最後に「直示性」とは、このような「直示空間」において話し手が「直示」を行う際に観察される諸性質のことだと考える。

以上の諸概念と理論装置を使いつつ、以下の第4節からは従来の韓国の国語学界における諸説明の妥当性についても合わせて検討していく。

#### 4. 直示的な「-겠-」と非直示的な「-을 것아-」について

##### 4.1 平叙文の場合

「-겠-」と「-을 것아-」に関しては이정민 (李廷旻 1973), 서정수(徐正洙 1977, 1978, 1996), 成者徹 (1979), 김차균(キム チャギョン 1981, 1999), 이남순 (李南淳 1995), 임홍빈 (任洪彬 1998), 이기용 (李基用 1998), Ho-Min Sohn (1999), 朴鎮浩 (2011) 等、数多くの先行研究があった。以下「-겠-」と「-을 것아-」の用法を分ける基準別に各先行研究を検討し、各説明の妥当性を検証していく。

##### 4.1.1 推定の強弱という基準について

이정민(1973)は「-겠-」について推測様相素(추측 양상소, presumptive modal)と呼び、「짐작하다 ((斟酌하다)推測する、計り知る)」という思惟動詞から導出され则认为た。即ち、「나는 서울에 비가 왔(겠)다고 짐작한다 (私はソウルに雨が降った(だろう)と推測する)」のような文の抽象的構造から「서울에 비가 왔겠다(ソウルに雨が降っただろう)」、「짐작하건대, 서울에 비가 왔겠다 (推測するに、ソウルに雨が降っただろう)」のような二つの変異型が導出され则认为たのである。一方、「-을 것아-」については話し手の強い内的推測を表すと主張し、「3월이 오면 진달래가 필 것이다 (3月になるとツツジが咲くだろう)」のような例文は話し手が未来の事件が必ず起きるだろうと信じている時に成立す

---

<sup>4</sup> Crystal (1997:107)、翻訳は金善美(2006)による。

ると考えた。

이기용(1998)も「-겠-」と「-을 것-」を推定様相素(추정 양상소)と考えた。まず「-을 것-」は話し手が確信のないことを意味する「아마 (多分)」や「잘 모르지만 (よく知らないが)」のような形式と共起すると指摘した上で、「아마 방 선생은 총각일 것이다 (多分パン先生は独身だろう：下線は本稿の筆者による。以下同様。))」、「잘 모르지만 잠수교가 물에 잠겼을 것이다 (よく知らないけど潜水橋が水に浸かっただろう)」のような例文を挙げている。一方、「-겠-」推定文は「아마 (多分)」や「잘 모르지만 (よく知らないが)」のような形式とは共起しないことを指摘した上で「\*?아마 방 선생은 총각이겠다 (??多分パン先生は独身のようだ<sup>5</sup>)」、「\*?잘 모르지만 잠수교가 물에 잠겼겠다 (??よく知らないけど潜水橋が水に浸かったようだ)」のような例文(容認度の判定は原著者による)を挙げている。ここから「-겠-」は話し手の確信のある推定と言えとし、このような推定を強い推定と呼んだ。これに加えて、「-겠-」が多くの場合意志あるいは約束を表す補助語幹として解釈される理由も、それが強い推定を意味するからだと説明した。

이정민(1973)と이기용(1998)は共に「-겠-」と「-을 것-」について話し手の推定の強弱という基準によって説明していて、特に「-겠-」と「-을 것-」が結合するモダリティ副詞の種類を観察している。しかしその考察の結果、話し手の強い心的確信を表す要素として이정민(1973)は「-을 것-」を挙げ、이기용(1998)は「-겠-」を挙げるなど、互いに反対の主張をしている。確かさの程度を表すモダリティ副詞類と「-겠-」/「-을 것-」との共起関係を調べる作業は意義があるが、「-겠-」と「-을 것-」の出現方式の違いを統一的に説明できる基準が提示できない限り、単に個別用例を説明する作業に終わってしまう恐れがある。

#### 4.1.2 聞き手や第3者の判断を包括するか排除するかについて

一方、이남순(1995)は推定の強弱という要素とは関係なしに「-겠-」と「-을 것-」をそれぞれ違う判断の表現形式としてみなしている。この「判断」という要素によって統一的な説明を試みている点は評価できる。本稿においては이남순(1995)の説明を検討するとともに、合わせてその反例を提示する。

이남순(1995)は「-겠-」と「-을 것-」を次のように区別している。まず「-겠-」は話し

<sup>5</sup> ここでは先行研究上の韓国語例文の日本語訳を「총각일 것이다」→「独身だろう」、「총각이겠다」→「独身のようだ」に訳している。その理由としては、「だろう」は話し手の発話時の判断を表し、「ようだ(話し言葉では「みたいだ」)」は話し手の直接体験したこと(視覚、自分の調査等)に基づく推定を述べる形式であることから(益岡・田窪 (1992:127-128))、「-을 것-」は「だろう」、「-겠-」は「ようだ」に対応していると考えからである。

手が聞き手や第3者の判断が排除される判断を下す際に使う話し手の「排除的判断」を表すとし、「-을 것이-」は話し手が聞き手や第3者の判断を包括する判断を下す際に使われる話し手の「包括的判断」を表す様態範疇表示形式だと考えた。

このような説明が当てはまる状況としては次のような例がある。

- (5) a. (家の外で空を見上げて) 곧 비가 오겠다. 집에 빨리 돌아가자.

「すぐ雨が降りそうだ。家へ早く帰ろう。」

- b. (家の中で TV から天気予報を聞いた後、外出する家族に向かって)

오후에는 비가 올 거야. 우산을 가지고 가라.

「午後には雨が降るだろう。傘を持っていきなさい。」

- (6) a. (선생님이) 가셨겠다. 빨리 뛰자.

「(先生が)いらっしゃったようだ。早く走ろう。」

- b. (선생님이) 가셨을 거다. 뛰어 봐야 소용없어.

「(先生が)いらっしゃったであろう。走ったところで間に合わない。」

(이남순 1995, 下線と日本語訳は本稿の筆者による)

이남순(1995)の説明に従うとすれば、例(5a)と(6a)は「-겠-」を使った話し手の排除的判断を表し、自分の判断だけを根拠に聞き手にある行動を勧めていることになる。一方、例(5b)と(6b)は「-을 것이-」を使って聞き手や第3者の判断を意識していることがわかる、話し手の包括的判断だと捉えることも可能ではある。

しかし、問題は次の例(7)のような例である。

- (7) a. (기상통보관의 발언) 내일은 남부지방에 걸쳐 있는 기압골의 영향으로 남부지방에 많은 비가 내리겠습니다.

「(氣象予報士の発言) 明日は南部地方にかかっている気圧の谷の影響により南部地方に大雨が降るでしょう。」

- b. (관광가이드의 발언) 다음으로는 제 2 공장을 견학하시겠습니다.

「(觀光ガイドの発言) 次は第2工場をご覧いただきます。」

(이남순 1995, 下線と日本語訳は本稿の筆者による)

例(7)について이남순 (1995)は次のように解釈する。(7a)は氣象予報士の解釈が視聴者へ一方的に伝達される排除的判断であり、視聴者の判断が氣象予報士の判断に介入する余地が



ない状況であるため「-ㄷ-」が使われたと説明する。また(7b)も観光ガイドが、すでに決まった計画や日程に対する自分の排除的判断を聞き手に伝達していて、旅行者の判断がガイドの判断に介入する余地がないことから「-ㄷ-」の使用が自然だという。

ところで(7a)について이남순 (1995)が説明しているように、気象予報士の下す判断は衛星写真、気圧配置、雲の移動等、客観的かつ科学的な根拠を土台にしたものである。もしその情報が気象予報士と視聴者に同等に公開されている情報であるならば、両者にとって同等に客観的な判断の根拠になり得る。また(7b)の工場の見学コースに関する情報も観光客に事前にパンフレットが配布されている状況であるならば、観光ガイドと観光客の両方ともにとって同等に客観的な判断の根拠になり得る。即ち、同じ気象情報に関する話題の場合でも推定の根拠となる、既に獲得した知識によって一般人が推測をする場合、あるいは同じ観光情報でもパンフレットやインターネット上の情報のようにすでに決定されたスケジュールを公開する場合であるならば「-을 것 이-」の使用が見つかる。次の例を見られたい。

- (8) a. 요즘에 지구온난화의 심화로 인해서 우리나라의 여름 날씨가 많이 이상해졌죠. 그리고 태풍은 여름에 안 오고 가을에 왔구요. 가을 날씨도 이상할 수 밖에 없습니다. 봄 날씨도 초여름처럼 더웠죠. 그래서 저는 여름날씨가 예전과는 많이 다를 것이라고 예상했죠. 올겨울도 마찬가지로 마찬가지일 것입니다.

「最近、地球温暖化が進むにつれて韓国の夏の天気がかなりおかしくなりましたよね。そして台風は夏に来ないで秋に来ましたし。秋の天気も変にならざるを得ません。春の天気も初夏のように暑かったですね。それで私は夏の天気が以前とはかなり異なるだろうと予想したのです。今年の冬も同じでしょうね。」 (出典：[http://physics.kaist.ac.kr/bbs/view.php?id=qna&page=8&sn1=&divpage=1&sn=off&ss=on&sc=on&select\\_arrange=headnum&desc=asc&no=448](http://physics.kaist.ac.kr/bbs/view.php?id=qna&page=8&sn1=&divpage=1&sn=off&ss=on&sc=on&select_arrange=headnum&desc=asc&no=448), 日本語訳：本稿の筆者)

- b. 그러나 무엇보다도 이 방문의 하이라이트는 드디어 포르쉐를 인수하는 순간일 것입니다. 팩토리 컬렉션 팀원이 차량 키를 드리면서 차량에 대해 알아야 할 모든 내용을 설명해 드릴 것입니다.

「しかし何よりもこの訪問のハイライトはとうとうボルシェを引き取る瞬間でありましょう。ファクトリーコレクションのチームメンバーが車のキーをお渡ししながら車についておわかりいただくべき全ての内容をご説明いたしましょう。」 (出典：<http://pap.porsche.com/korea/ko/models/911/911-carrera-s/service/factorycollection911/>, 日本語訳：本稿の筆者)

例(7a)(7b)と例(8a)(8b)で扱っている内容は、それぞれ気象に関する予想、工場見学に関する案内という点から同一である。それにもかかわらず「-겠-」と「-을 것아-」の使用の区別が観察されることから、이남순 (1995)の「排除的判断 / 包括的判断」という基準ではうまく説明されない要素があることがわかる。

#### 4.1.3 情報における直示性の有無という基準について

ここで김차균 (1999)の次の例について考えてみたい。

(9) a. 지구는 내일도 돌 것이다.

「地球は明日も回るだろう。」

b. \*지구는 내일도 돌겠다.

「\*地球は明日も回るようだ。」(김차균 1999, 下線と日本語訳は本稿の筆者による)

例(9a)が自然な理由について김차균 (1999)は、地球はいつか回らず止まるだろうという考えが存在するためにこのような発言が可能だと説明する。一方例(9b)を非文として感じる理由は、地球が明日も回るという判断が発話瞬間の状況判断により行われるのではないためだと説明する。

김차균 (1999)のこの説明は次のような示唆を与える。つまり、同じ情報内容でもその内容が論理的根拠による推定でもって伝達できる内容なのか、あるいは発話瞬間の判断によって伝達できる内容なのかが、文の容認度を決めるということである。

この示唆により、話し手の排除的判断よりは、直示空間を含む発話の現場で起きた判断であるかの可否、即ち現場性と直示性という要素が「-겠-」の使用を自然にしていることがわかる。例(7a)と(7b)の場合も話し手の排除的判断によるというよりは、現場性と直示性が問題になることから「-겠-」の使用が自然になる。例(7a)は天気予報を伝える気象予報士が視聴者を前にして、現場にあるデータを分析している臨場感が伝わる直示的な表現である。また例(7b)は観光ガイドが直接観光客を引率しながら第 1 工場の見学が終わった時点と空間においてのみ発言できることから直示的な表現である。これに比べ(8a)は視聴者のような特定の人々を対象としてデータを分析、伝達しているというよりは、書き手が自分のブログに書き手(話し手)の推測を書き込んでいる状況である。ブログの読者こそいるかもしれないが、(8a)を書いている人がその読者にオンラインで気象予報を伝えるべき義務はない点で(7a)の状況とは異なる。また(8b)も観光ガイドが特定の観光客を引率しながら現場で即時説明をしている状況ではなく、インターネットの案内文を読むかもしれない不特

定多数の人々全員に工場見学の全体スケジュールを説明している状況である点で(7b)とは異なる。以上から例(8a)(8b)は非直示的だということがわかるし、非直示的推量を表す平叙文においては「-을 것 이-」の使用が自然である。

「-겠-」の使用には現場からの直示的情報が関与するという立場は朴鎮浩 (2011)によっても共有されている。朴鎮浩 (2011)は「-겠-」と「-을 것 이-」の出現を分ける知識の種類について言及しているが、感覚的経験を通じて得られた根拠(=知覚情報)をもとにして推測(推理による推測)を行う際は「-겠-」が好まれ、一般的知識を根拠にして推測(推論による推測)を行う際は「-을 것 이-」が好まれると説明する。さらに「-겠-」と「-을 것 이-」の違いについて次のように指摘している。まず、「-겠-」は推測を通じて<発話時の直前>に知ることのできた<新情報>を表すものであり、<意外性(mirativity)<sup>6</sup>の意味成分>が入っているとする。それに比べ「-을 것 이-」は情報の種類は新情報ではなく、また情報の獲得時期が必ずしも発話時の直前であるわけでもなく、意外性の意味成分も入っていないとのことである。このように「-겠-」と「-을 것 이-」のそれぞれの基盤知識を、感覚的経験を根拠にした推測と一般的知識を根拠にした推測に分ける考え方は、本稿の立場と近いと言える。

#### 4.2 疑問文の場合

「-겠-」と「-을 것 이-」が参照する基盤知識の性質の違いに関しては、「-겠-」と「-을 것 이-」が使われた疑問文の例を観察してみるとその特徴がより明確にわかる。次の例を見られたい。

- (10) a. (アンカーがニュース番組の中で天気予報担当の気象予報士に向かって)

내일은 비가 오겠습니다까?

「明日は雨が降るでしょうか。」

- b. (アンカーがニュース番組の中で天気予報担当の気象予報士に向かって)

\*내일은 비가 올 것입니까?

「??明日は雨が降ることになっていますか。/\*明日は雨が降るつもりでしょうか。」

---

<sup>6</sup> 「의외성(mirativity)이란, 문장에 표현된 명제가 뜻밖임(unexpectedness), 신정보(new information)임을 나타내는 문법범주이다.」(朴鎮浩 (2011:7) (日本語訳(本稿の筆者): 意外性(mirativity)とは、文に表現された命題が予想外であること(unexpectedness)、新情報(new information)であることを表す文法範疇である。)

(11)(=4) a. (道行く人が空を見上げながら、畑仕事をしている人に挨拶として声をかけて)

내일은 비가 오겠습니까?

「明日は雨が降るでしょうか。」

b. (道行く人が空を見上げながら、畑仕事をしている人に挨拶として声をかけて)

\*내일은 비가 올 것입니까?

「??明日は雨が降ることになっていますか。/\*明日は雨が降るつもりでしょうか。」

例(10a)と(11a)はそれぞれ、発話内容を質問する相手である聞き手、その発話現場が異なるにもかかわらず、「-겠-」の使用が両方とも自然である。例(10a)の聞き手は天気予報担当の気象予報士であり、発話の現場はニュースの撮影スタジオである。一方、例(11a)の聞き手は話し手の目の前で畑仕事をしている人であり、発話の現場は空の雲の模様が観察できる野外である。一見すると共通点がなさそうな二つの状況設定であるが、「-겠-」の使用が両方とも自然な理由は、話し手と聞き手が共有する直示的な現場に存在する気象データや、空の雲の模様のような視覚情報に依存して会話が行われているためである。一方、例(10b)と(11b)において「-을 것-」の使用が不自然な理由は、雨が降るという自然現象においては前もって定まったスケジュールや決定された未来があり得ないからである。

#### 4.3 談話理論による説明

以上の観察結果についての説明を、まず田窪(2006)の談話管理理論から考えてみると、「-겠-」と「-을 것-」が表す推量の根拠になる知識は両方とも D-領域に属するものであることがわかる。第2節で前述したように、この D-領域に含まれている直接アクセスできる命題には、発話現場から知覚などの直知(直接知識)により情報のアップデートが行われる直示情報と、既に話し手に獲得済みの非直示情報が存在する。「-겠-」と「-을 것-」はそれぞれこの直示情報と非直示情報に基づいた推論である。「-겠-」と「-을 것-」が取る節自体は推論の帰結であり、D-領域に属するものではないが、そのような推論を行うためのそれぞれの知識データベースの種類は異なる。即ち、「-겠-」は deictic な状況から予測可能な未来 (I-領域)や、過去あるいは直接はわかりにくい現在状況(R-領域)に関連したことについて推測する表現だと言える。言い換えれば、既存の一般知識にあらたに deictic な知識を付加して予測と推測を行うことだと言える。一方、「-을 것-」の場合も既存の直接知識から論理的な帰結を誘導するものではあるが、その際動員する知識が deictic な知識ではない、という点で「-겠-」とは異なるものである。

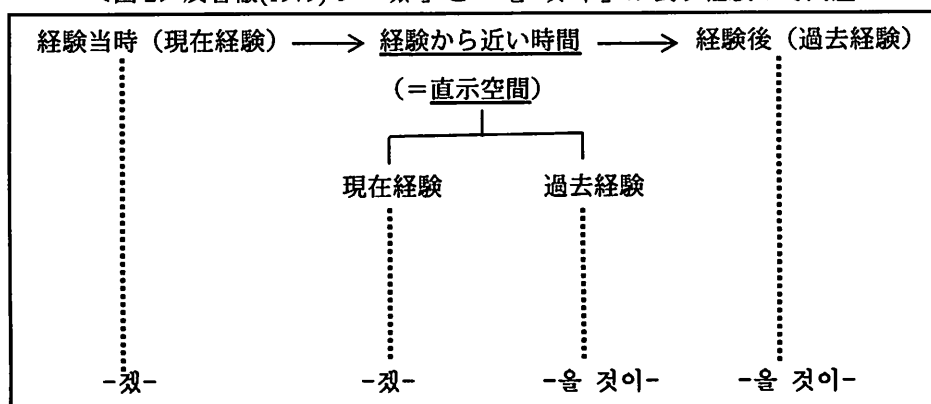
次に東郷の談話モデルから考えてみると、「-겠-」が表す推量の根拠となる知識は「発

話状況領域」に存在する直示的な知識である。一方、「-을 것이-」が表す推量の根拠となる知識は、「共有知識領域」の中の世界知識に関する「百科事典的知識」と話し手個人の「エピソード記憶」に存在する非直示的な知識であることがわかった。

#### 4.4 経験にかかわる所要時間の推移による「-졌-」と「-을 것이-」の出現順序について

ここまで主に推量用法を中心に「-졌-」と「-을 것이-」の出現にかかわる帰属情報領域の違いについて考察してきた。ところで、発話現場において経験したイベントについて言及する際は、時間の流れに沿って「-졌-」と「-을 것이-」の現れ方には出現の順番が存在する。この出現順序について考察することは、「-졌-」と「-을 것이-」の基盤情報の帰属領域をより明確に区別する上で役立つ。この点と関連しては成者徹(1979)が有意義な考察を行っている。成者徹(1979)は、「-졌-」は経験当時、即ち現在の経験に判断の根拠を置いている推定であり、「-을 것이-」は過去の経験に根拠を置いた推定であることを明らかにした上で、経験にかかわる所要時間の推移による「-졌-」と「-을 것이-」の出現順序についても考察している。この出現順序に関する考察は、最近の研究成果の中でも分析例が乏しいため、成者徹(1979)の成果として注目すべき点である。詳述すると成者徹(1979)によると、経験当時から離れるほど、即ち遠い過去の経験に依存するほど「-을 것이-」推定になり、経験当時に近いほど「-졌-」推定になるとのことである。またこれら両者の推定がこのような経験の違いによって弁別される限り、両者は決して混同されないという。例えば同じ時間と空間の中で二つの推定が可能だとしても、その二つの推定の根拠はまったく異なるところに存在するという。この観察結果は下の<図 2>のようにまとめられる。

<図 2>成者徹(1979)の「-졌-」と「-을 것이-」が表す経験の時間差



※下線と「直示空間」の添加及び日本語訳は本稿の筆者による。

ここで成者徹(1979)の説明の妥当性について検証する。以下では成者徹(1979)の例を援用した、本稿の筆者による例(12)について考えてみたい。

- (12) (実力のまったく知られていない二つのサッカーチーム、A チームと B チームは、近く試合を控えている。ある日、両チームが同時に同じグラウンドで軽い練習をしている。その練習を、両チームに関していかなる情報も持たない甲と乙と丙が、練習の最初から眺めている場面である。三人は、両チームによる今度の試合でどのチームが勝てそうかについて話している。)

<練習が始まって間もなく>

a. 甲: A 팀이 이기겠어. 「A チームが勝ちそうだ。」

乙: B 팀이 이기겠어. 「B チームが勝ちそうだ。」

↓

<かなりの時間の間、練習を観察した後>

b. 甲: A 팀이 이길 거야. 「A チームが勝つだろう。」

乙: B 팀이 이길 거야. 「B チームが勝つだろう。」

c. 甲: A 팀이 이기겠어. 「A チームが勝ちそうだ。」

乙: 아냐, B 팀이 이기겠어. 「違うよ、B チームが勝ちそうだよ。」

丙: 아냐, A 팀이 이길 거야. 「違うよ、A チームが勝つだろうよ。」

↓

<練習の途中で席を立ち、帰途にて>

d. 甲: 아까 두 팀 말이야, 역시 A 팀이 이기겠어.

「さっきの両チームだけどさ、やっぱり A チームが勝ちそうだよ。」

乙: 아냐, B 팀이 이기겠어. 「違うよ、B チームが勝ちそうだよ。」

丙: 아냐, A 팀이 이길 거야. 「違うよ、A チームが勝つだろうよ。」

↓

<練習だけを見て試合は見ないまま数カ月経過した後、回想しながら>

e. 甲: 석 달 전에 본 두 팀 말이야, 역시 A 팀이 이겼을 거야.

「三カ月前に見た両チームだけどさ、やっぱり A チームが勝つただろうね。」

乙: 아냐, B 팀이 {이겼을 거야 / ???이기겠어}

「違うよ、B チームが {勝つただろうよ / ??勝ちそうだったよ}。」

例(12a)は観察対象のサッカーチームが実力のまったく知られていない二つのサッカーチ

ームであり、かつ観察を行っている話し手はそれらのチームについていかなる情報も持たないため、発話直後の時点では対象への参照情報がない状態である。従ってその現場で獲得した視覚的情報に基づき「-ㄹ-」推定のみが許される。しかし、練習が進んだ後は両チームに関する判断材料が増えてくるため、例(12b)(12c)のように「-ㄹ-」と「-을 것 이-」推定の両方が可能である。また経験現場の近くである直示空間の中で上記の会話が行われる例(12d)の場合は、先ほど終わったばかりの経験について、まるでまだ目の前で続いているかのように言及するならば「-ㄹ-」の使用も可能である<sup>7</sup>。しかし、経験済みのこととして過去の諸既得情報に照らし合わせて推量作業が行われる場合は「-을 것 이-」推定も可能である。最後に、当該イベントの経験から三カ月も時間が経過し、当該イベントが過去の経験になった例(12e)の場合は「-을 것 이-」推定のみが許される。このように直接経験後、時間の経過によって「-ㄹ-」と「-을 것 이-」推定は「-ㄹ-」→「-ㄹ-」/「-을 것 이-」→「-을 것 이-」の順で出現することがわかった。

以上の観察から、前述した<図 2>と関連する成者徹(1979)の説明は、例(12)を基に述べた本稿の流れと一致するものであることが確認できた。

## 5. 結論

以上の考察の結果をまとめると次の通りである。まず「-ㄹ-」は、D-領域に存在する知識の中で現場に存在する知識に基づいて意志の決定や推論を行う形式である。その基盤知識は「発話状況領域」に登録されている直示的な知識である。

次に「-을 것 이-」は、D-領域知識の中でも既得知識やスケジュールのような、既に決定済みの知識から必然的に導出される結論、すなわち決定された未来と意志しか表せない非直示的な情報を表す形式である。その基盤知識は「共有知識領域」の中の世界知識に関する「百科事典的知識」と、話し手個人の「エピソード記憶」に存在する知識である。

最後に、経験にかかわる所要時間の推移による「-ㄹ-」と「-을 것 이-」の出現順序においては、「発話現場→経験直後の直示空間→経験後」の時間経過に伴い「「-ㄹ-」→「-ㄹ-」/「-을 것 이-」→「-을 것 이-」」の順で出現することが確認できた。

---

<sup>7</sup> 成者徹 (1979)は、あるイベントを経験した現場ではなくても「-ㄹ-」の使用が可能なことから「-ㄹ-」が必ずしも「現場性」を要求するのではないという。「現場性」よりは「現在性」という用語が適切だという。「現在性」は「現場性」を包括するが、なぜなら「現在」は話者の主観やその他の状況によって相対的な幅を持つことが可能だからだと説明する(成者徹 (1979: 227))。この「現在性」は、本稿における「直示性」とつながる概念だと思われる。

## 注

本稿の執筆に当たって玉井尚彦先生と千田俊太郎先生からは原稿の最初から最後まで目を通していただき、沢山の有意義且つ示唆に富んだコメントをいただいた。記して心から感謝いたします。ただし本稿にありうべき全ての誤りは執筆者の責任である。

## 参考文献

- 김선미 (2011) 「반어적 의문문과 모달리티부사에 관하여」, 濟州方言研究会 2011 下半年定期學術大会, 国立濟州大学校 (韓國). (金善美 (2011) 「反語的疑問文とモダリティ副詞に関して」)
- 김선미, 다쿠보 유키노리, 정성여, 치다 순타로 (2008) “을 것’이 나타내는 추측의 성질에 대하여—의문문의 제약의 관점에서—」 『社団法人韓國言語学会 2008 年度冬季學術大会資料集』 pp. 91-101. 社団法人韓國言語学会 (韓國). (金善美・田窪行則・鄭聖汝・千田俊太郎 (2008) 「「ul kes」が表す推測の性質について—疑問文の制約の観点から—」)
- 김차균 (1981) “을’과 ‘겠’의 의미”, 『한글』 제 173, 174 호, 한글학회. (キム チャギョン (1981) 「「ul」と「keyss」の意味」, 『ハングル』第 173, 174 号, ハングル学会)
- 김차균 (1999) “우리말의 시제구조와 상 인식”, 태학사. (キム チャギョン (1999) 『韓國語の時制構造と相認識』, 太学社)
- 남기심·고영근 (2011) 『표준국어문법론 제 3 판』. 탑출판사. (南基心·高永根 (2011) 『標準國語文法論第 3 版』, 塔出版社)
- 朴鎭浩 (2011) ‘韓國語에서 證據性이나 意外性の 의미성분을 포함하는 문법요소’, “언어와 정보사회” 15 권 0 호, pp.1-25, 서강대학교 언어정보연구소. (朴鎭浩 (2011) 「韓國語において証拠性や意外性の意味成分を含む文法要素」, 『言語と情報社会』15 卷 0 号, pp.1-25, 西江大学言語情報研究所)
- 서정수 (1977) “겠’에 관하여”, “말” 2, 연세대학교한국어학당. (徐正洙 (1977) 「「keyss」に関して」, 『말』2, 延世大学韓國語學堂)
- 서정수 (1978) “르것’에 대하여”, “국어학”6, 탑출판사. (徐正洙 (1978) 「「l kes」について」, 『國語學』6, 塔出版社)
- 서정수 (1996) “국어문법”, 한양대학교출판원. (徐正洙 (1996) 『國語文法』, 漢陽大學出版院)
- 成蕃徹 (1979) ‘經驗과 推定—‘겠.’과 ‘을 것이.’를 중심으로—’, “문법연구”4,



- 문법연구회, 고영근, 남기심 편(1983) “국어의 통사·의미론”, 탑출판사에  
재수록. (成者徹 (1979) 「経験と推定—「-keyss-」と「-ul kes i-」を中心に—」, 『文法研究』 4, 文法研究会, 高永根・南基心編(1983) 『国語の統語・意味論』, 塔出版社に再収録)
- 이기용 (1998) “시제와 양상: 가능세계 의미론”, 태학사. (李基用 (1998) 『時制と様相: 可能世界意味論』, 太学社)
- 이남순 (1995) “‘겠’과 ‘ㄹ것’의 판단론”, “대동문화연구”30, 성균관대학교대동문화연구원.  
(李南淳 (1995) 「「keyss」 と 「l kes」 の 判断論」, 『大東文化研究』 30, 成均館大学大東文化研究院)
- 이정민 (1973) ‘언어행위에 있어서의 양상구조’, “현대국어 문법”, 남기심・고영근・이익섭(1975) 대구: 계명대학교 출판부, 번역재수록. (李廷玟 (1973) 「言語行為における様相構造」, 『現代国語の文法』, 南基心・高永根・李翊燮(1975) 大邱: 啓明大学出版部, 翻訳再収録)
- 임홍빈 (1998) “국어 문법의 심층 1 -문장 범주와 굴절-”, 태학사. (任洪彬 (1998) 『国語文法の深層 1 -文章範疇と屈折-』, 太学社)
- 金水敏 (2000) 「指示詞—直示再考—」 中村明編 『現代日本語必携』 別冊国文学, No.53, pp.160-163, 學燈社.
- 金善美 (2004) 『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』, 京都大学大学院博士論文.
- 金善美 (2006) 『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』, 風間書房(東京).
- 金善美 (2009) 「韓国語と日本語におけるムードと反語法について」 『朝鮮半島のことばと社会 油谷幸利先生還暦記念論文集』 pp. 365-374, 明石書店.
- 金善美 (2014) 「現代韓国語と日本語の反語法文を成立させる語用論的条件について」 『朝鮮學報』 第 233 輯: pp.(1)-(25), 朝鮮学会.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」 『日本語学』 vol.6, 明治書院.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」 仁田義雄・益岡隆志編 『日本語のモダリティ』 pp.211-233, くろしお出版.
- 田窪行則 (2006) 『日本語条件文とモダリティ』, 京都大学大学院博士論文.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」 『認知科学』 Vol.3, No.3, pp.59-74, 日本認知科学会.
- 田窪行則・金善美 (2009) 「韓国語と日本語のモダリティ表現の対照」 『朝鮮半島のことばと社会 油谷幸利先生還暦記念論文集』 pp. 298-312, 明石書店.

- 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 -談話における指示対象の確立と同定をめぐって-」  
『京都大学総合人間学部紀要』 6: 35-46, 京都大学.
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』  
7:27-46, 京都大学.
- 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の「現場指示的用法について」」『京都大学総合人間学部紀要』  
8:1-17, 京都大学.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法－改訂版－』, くろしお出版.
- 森山卓郎 (1989) 「認識的ムードの形式をめぐって」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモ  
ダリティ』 pp. 57-74, くろしお出版.
- Crystal, David (1997) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics (Fourth Edition)*. Blackwell  
Publishers.
- Ho-Min Sohn (1999) *The Korean language*, Cambridge University Press.
- Kim, Sunmi (2013) On ironical interrogative sentences and modal adverbs in Korean and Japanese.  
Invited research presentation at Language Department, Adam Mickiewicz University,  
Poznań, Poland.
- Takubo, Y and S. Kinsui (1997) Discourse Management in terms of Mental Spaces, *Journal of  
Pragmatics*, Vol.28, No. 6, pp.741-758.
- Takubo, Yukinori & Kim, Sunmi (2009) Question of Modals in Japanese and Korean. The 8th  
Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing, Kyunghee University,  
Korea.

(きむそんみ、天理大学国際学部)